二言語併用者の諸問題

―言語心理学の立場より（その２）―

小林素文

Psycholinguistical Approach to the Study of Bilingualism (2)

Motofumi Kobayashi

0. はじめに

二言語併用者の諸問題について，前稿[1]では，一方の極には，二言語にそれぞれ必然的に付随している二つの異った文化を共に内在化している二文化二言語併用者(coordinate bilingual)，もう一方の極には，一つの言語の文化のみを内在化し，もう一方の言語は伝達手段のみに使用されその文化は内在化されていない一文化二言語併用者（compoound bilingual）という二つのタイプの二言語併用者の存在が理論的に考えられるということ，およびその験証例を示した。

このモデルに対する反論は，Hangen によって次のように示されている。

> Any attempt to find a simple dichotomy of this type (compound coordinate model) among bilinguals was doomed to failure..... There could be a continuum from 'ideal' bilingual with two totally separated systems to the 'ideal' monolingual with only one, but it was a continuum with many dimensions, if that is conceivable. Fusion could take place in any part of the language; a truly 'coordiante' bilingual would be a schizophrenic and truly 'compound' bilingual would not a bilingual at all.[2]　((　) 内筆者注)

確かに，Hangen の述べる通り，compound-coordinate という指標のみで二言語併用者のタイプを決めることは単純すぎるので，他の指標の設定も必要であろう。また，compound-coordinate という指標自体もっと精巧なものとならなくてはならないであろう。しかしながら，一方の極にある二文化二言語併用者は痴呆者（schizophrenic)であり，もう一方の極にある一文化二言語併用者は二言語併用者でありえないというのも，前稿で示した験証例から明らかなように極論すぎるように思われる。いずれにしても，compound-coordinate モデルは，もっと精巧なものにならなければならないことは確かであり，このことに関しては現在いろいろ再検討されている。この件に関しては，別の機会に述べたいと思う。

本稿では，幼児期・子供期において二言語環境におかれた幼児・子供の二言語習得過程，およびその問題点を述べていきたい。

1. 幼児期 (Infant bilingualism)

幼児は，生まれいずるや，「オギャー」とこの世に第一声を放ち，やがて喃語期 (babbling stage) に入る。喃語期がすぎ，幼児が初期に発達させていく音素は，幼児がどの言語環境で育っていようと，村田孝次が「新生児ないし乳児初期には音素に言語環境特性の影響がみられないことは，アメリカの白人と黒人の新生児の間 (Irwin, 1952) や日本人とアメリカ白人の乳児の間（中島・岡本・村井，1960）で示された[3]」と述べているように，一定の規則性がある。

また，幼児の発達させていく語にも，Stern, Leopold が次に述べているような規則性がある。

> Many of the first genuine words of children of different nationalities are also almost identical *pa*, *ba*, *ma* to denote parents or food; parting and leaving is expressed by *atte*, *ade*, *ada*, etc. (C. and W. Stern)..... W. F. Leopold.... quotes several authors of different nationalities (Wundt, Compayré, Preyer, C. Franke, Darwin, Taine, Heinicke, Fritz Schulze) who have shown that 〔m〕 sounds are associated in children speech with food. [4]

上述の如く，pa, ba, ma, が親や食べもののことを差したり，〔m〕音が食べものと関連した語となることは，幼児の言語環境とは独立したものである。

語を発達させてきた幼児は，やがて，二語文，さらに三語文へと言語能力を発達させていく。こうした語連鎖の発達は，Cazden が次に述べているような，幼児の外界への認知活動の発達と密接なつながりがある。

> Brown has described some nine basic kinds of two-word utterances used by monolingual children at about two years of age around the world. One kind, for example, indicates *possession* ("Mommy sweater" or "My ball"), another *location* ("Sweater chair" or "Pencil cup"). But time relation which could also be expressed in two-word utterances like "Fall yesterday" do not appear. [5]

上述の如く，二語文の発話されるころは，言語環境とは独立に，幼児は，場所 (location) や所有 (possession) の認識はできるが，時間関係 (time relation) の認識は，まだできていないといえる。このことを別の角度から論ずれば「1歳時の比較的早い時期に生じたものは，情況・評価・存在非存在・好嫌・情動・感覚であり，比較的後期に生じたものは，命名・指定・過去・完了・否定・要求・意図であった。要するに，概して眼前に表示すべき事象が与えられていないような内容の敍述（非眼前事象の敍述）はあとの時期になってはじめて生ずるといえる[6]」（下線筆者）ともいえる。つまり，語連鎖の発達にも，幼児の言語環境とは独立の規則性があるといえる。

上述の如く，幼児の発達させていく音素・語・語連鎖には，幼児のおかれた言語環境のいかん

にかかわらず発達していく一定の普遍性があるといえるが，このことを，言語の普遍性（language universal）を子供の生得的な言語能力（inborn capacity of language）と結びつけている変形文法理論の枠組の中で述べれば，幼児の生得的言語能力の発達は，幼児の言語環境にかかわらず一定の法則があるといえる。ここから当然類推されることは，二言語環境の幼児でも，こうした普遍性の中で言語発達をしていくのであろうということである。しかしながら，二言語環境の幼児は，表面的には異った体系をもつ二言語をどのように異った体系として認識し発達させうるのかといった意味で，一言語環境の幼児とは何らかの異った言語発達をしていくはずである。この点を，両親がそれぞれ異った言語を，子供の誕生と同時に用いている家庭環境におかれた幼児を例にしてみていく。

J. Ronjat の子供 Luis は，母親がドイツ語，父親はフランス語という言語環境に育ち，家族はフランスに定住していた。この Luis の4歳10ケ月にいたるまでの言語発達について，J. Ronjat は次のように述べている。

> The pronounciation was from the very beginning that of a unilingual child in both languages (イ); bilingualism did not lead to backwardness in speech; loans from one language into the other remained isolated; parallel development of phonetics, morphology and syntax took place in both languages; child soon became aware of his bilingualism and translted messages from one language (ロ); he also acquired the abstract of language.[7]（下線・記号筆者）

Luis は，5歳近くには完全な[8]二言語併用者になっていたわけであるが，ここで問題は，下線部(イ)で述べられている，発音がはじめから二言語それぞれに特有なものであるということが何を基準にしていえるのかという点と，下線部(ロ)で，Luis はやがて（soon）異った言語にさらされていることに気づき，一方の言語をもう一方の言語に置換できると述べているが，この「やがて」とはいつ頃のことなのか，またそれは，受容面における二言語の区別と生産面における区別と合致するのかどうかという点である。この二つの問題を言語学者 W. F Leopold の観察から考えてみる。

Leopold の子供 Hildegard は，父親（W. F. Leopold）はドイツ語を母親は英語を，彼女が生れた時から用いる言語環境で育った。家族は，ほとんどアメリカ合衆国で生活をしていたが，Hildegard が 0. 11-1. 2 および 4. 11-5. 6 の間は，ドイツに滞在し，その期間のみは，母親もドイツ語を話す，ほとんど全てドイツ語の言語環境であった。

音声面の Hildegard の発達については，次のように述べている。

> Hildegard had already a wider experience, passively, with varieties of sounds than monolingual children. Actively, however, her sound-system scarecely exceed that of monolinguals..... Both sounds were introduced into words coming from both languages. Each might have occurred if Hildegard had been exposed to only one language. They prove nothing for a phonetic effect of bilingualism.[9]

受容面において，Hildegard は一言語環境の幼児よりも多くの音を聞いているにもかかわらず，生産面においては一言語環境の幼児と変わらないことは，二言語環境の幼児でも二才にいたるまでの音発達は，一言語環境の幼児と変わらない普遍的な発達をとげているといえるのではないだろうか。

一語文・二語文の発達については次のように述べている。

> In looking back over the effect of bilingualism on Hildegard's early language, we find that it was striking in her vocabulary, because she chose words from both language as carriers of her communications, and combined them into utterances with no regard for their linguistic provenience. She was the sole arbiter of her choice, which favored now one language, now the other, with shifts of emphasis due to linguistic enviroment, but never entirely determined by it[10]

一語文においては，二言語の語彙を用いるが，必ずしも，父親にドイツ語，母親に英語ということもない。さらに二語文となると，彼女の発話は混成形態（hybrid system）となり，例えば，cry-baby da/all nass/no mehr のような，文の中にドイツ語・英語が語彙が混りあってくる[11]。

Hildegard が二語文において混成形態の文を発話することは，例えば，ハワイの日系一世達の使った，"no money nara no can yo.[12]"（お金がなければだめだよ）と同質のピジン言語の様相を呈しているといえる。しかし，Hildegard は，彼女の混成文をそのまま発達させていくのではなく，二才をこえると，彼女の文の中から徐々にドイツ語の要素が消えていくことは，次に述べられている通りである。

> In later months, when her English-speaking enviroment became wider because she got around more and played with neighbor children, English became the language to which she responded more readily and the English elements of her vocabulary multiplied.[13]

大人が異言語に接触するようになると，自国語の要素を残したピジン言語を発達させていくことと，Hildegard が二才にいたる頃まで混成文を発達させ，それを過ぎ英語環境が大きくなると共に徐々にドイツ語の要素が消え，やがて英語を身につけていくことの違いは，大人の新しい言語への順応と子供のそれとの根本的な違いから生ずるものである。この違いの生ずる神経生理学的側面，心理・社会的側面からの説明は次章で述べるが，ここでは，ピジン言語と幼児の混成文の違いについて考えてみる。

ピジン言語は，大人が未知の言語環境におかれた時，受容面においてはいろいろな状況から判断してその言語内容を理解していき，生産面においては自国語の枠組の中で文を作っていくものであり，R. Hall が Haiti におけるクリオール（ピジン言語が，一国ないし社会で一つの独立した言語としての地位を受けるまでになったもの）の研究をまとめて，

> We might say that these (creolized languages) are *language consisting almost entirely of loanwords*. The survival of African origin are the shattered fragments of the original structure.[14] (( ) 内筆者)

と述べているように，意味内容を表す単語は全て借用語であり，文法機能の枠組は自国語のものであるといえる。一方，Hildegard の場合は，単語は全て意味内容を表すものであり，ドイツ語・英語の区別なく文の中に入ってくる。また，彼女が二語文の中で作りあげている文法の枠組は，まだどちらの言語にも片寄っていない。従って幼児の混成文は，大人のそれとは異り，二言語を異った体系としてまだ区別しておらず，あたかも，一つの言語の如く，二言語から一つの体系を作りあげているといえる。

二言語環境の幼児が二言語の語彙を一つの枠組の中で未区分のまま使っていき，二才頃を境にして，二言語を異った体系として分離していく過程は，Hildegard のみの特殊なことではなく，他でも報告されている。

> Interesting work on the psychology of bilingualism was initiated in Georgia by Uznadze, followed by Imedadze. In their view the two languages of a bilingual child, to begin with, constitute a single verbal repertoire, and components of both languages are used indiscriminately in the young child's communication with adults. After a short period at about 1.8 years, the two systems begin to separate until at about 2 years independent vocabularies are recognised by the child, and two independent grammatical systems are gradually formed.[15]

Imedadze は，上述のような，二言語環境の幼児の二才頃までの混成文の発達と，それ以降の二言語それぞれの体系を区別し発達させていく現象について次のように述べている。

> The first stage of the child's language development, chracterized by the undifferentiated use of elements from both languages indicates that what the child is concerned to do is by using materials from both languages without restraint to create one system, which only later becomes differentiated into separate languages. The undifferentibted stage corresponds to the development of *competence*, the differentiated stage corresponds to the level of performance, in either language.[16]

二才頃までの二言語環境の幼児の混成文は，Imedadze によると，幼児が生得的にもっている言語能力（competence）を発達させていることであり，それ以降二言語を区別し体系づけていくのは，言語運用能力（performance）を発達させていることになる。

幼児の二言語を区別していく二才以降の時期が，果して言語運用能力のみを発達させている時期といえるのかという点については，言語環境に応じて二言語を使いわける能力を発達させていく時期としてとらえれば，言語運用能力の発達としてとらえるべきであるが，二才以降，複雑な時間関係を表す文，受身文等の発達は，言語能力の発達といえるので，二才以降の

言語発達は，言語能力・言語運用能力を共に発達させている時期といえる。一方，二才以前の幼児の混成文は，この時期の幼児は言語能力のみを発達させており，どの環境でどの語の組み合わせをするのかといった意味での言語運用能力を発達させてはいないことをもの語っている。このことからも，二言語環境の幼児の混成文は，幼児の言語発達の普遍性の中で論じられる必然性がある。

二言語環境の幼児が二才頃まで混成文を発話することは，幼児が受容面においても二言語を区別していないことにはならない。Leopold は次のように述べている。

> At 1;4 I told her "Aufstehen!" She complied and said *up*.....At 1;8 upon the challenge, "Licht aus!", she switched the light off and said *Light out*..... At 1;11, trying to settle her for sleep at night, I told her: "Alle kleinen kinder sind jetzt im Bett." Her echo was: *All babies Bett.*[17]

一方の言語で命令すると，Hildegard がその命令通り行動したあと，もう一方の言語でその命令を繰り返すということは，幼児は表面的模倣のみによって言語を発達させているのではなく，意味認識がなされた上で，いわば翻訳しているといえ，ここから二言語環境の幼児が生産面で混成文を作っていても，受容面においては二言語の区別をしているといえる。そしてこの受容面においての二言語を区別しうる認識が土台となり二才以降，生産面においても区別がなされていくといってもいい。

幼児の二才までの言語発達を，Leopold は，次のように総括している。

> When we examine the less obvious features of Hildegard's early language, the sounds, the forms, the syntax, the word-formation, we find very few effects of bilingualism. She adopted into her speech the features which the two languages have in common, and on the elementary level, English and German are very similar.[18]

ここで Leopold の述べている，elementary なレベルでは英語とドイツ語は類似しており，Hildegard が二言語に共通したものを獲得していくということは，これまでの考察から次のように言いかえることができる。言語は，どの言語でも本質的には同じ性格をもち，従ってどの言語環境におかれていようが，幼児は本質的には同じ言語発達をとげる。このことは，二言語環境におかれた幼児でも例外ではなく，二才にいたるまでの音発達の普遍性，混成文の発達は，言語能力の発達としてとらえることができる。ここから，Ronjat の子供 Luis において呈示された第一の問，即ち，発音がはじめから二言語それぞれ特有なものであるといえる基準については，幼児の発達させていく音体系の普遍性の中で論じられる必要があり，Ronjat のいう二言語特有なものであるというのも，いいかえれば，どの言語にも特有なものであるともいえよう。第二の問，即ち，「やがて」異った言語体系におかれていることに気づくと漠然と述べてある点については，受容面においては二才以前においてすでに気づいており，生産面に

おいては二才以降にはじまるといえる。

2. 子供期 (child bilingualism)

大久保愛は幼児のことばの発達を次のようにわけている。

(1) ことばの準備期（0才）
(2) 一語文の時期（一才前後）
(3) 二語文の発生（一才半前後）
(4) 第一期語獲得期（二才前後）
(5) 多語文・従属文の時期（二才半前後）
(6) 文章構成期（三才前後）
(7) 一応の完成期（三才～四才）
(8) おしゃべりの時期（四才代）
(9) 第二期言語獲得期（五才代）[19]

以上の区分は，幼児の外界の認知能力の発達と関連し合って発達していく幼児言語発達の現象面をとらえたものである。上の区分による，二言語環境の幼児の，(4)第一期語獲得期にいたるまでの言語発達については前章で考察した。二言語環境の幼児が生産面で二言語を区別できるようになる二才以降の言語発達については，充分な研究がなされていない[29]。そこで本章では，上記区分の第一期語獲得期から第二期語獲得期にいたる過程をとばし，第二期語獲得期からの子供の第二言語の習得，特に，子供が幼稚園あるいは小学校で，家庭およびその周辺社会とは異った言語を使わなければならない場合について述べていく。

Haugen は，子供を第二言語に学校の中でさらしていくことは，第一言語が既に固ったあとでもあり，適切な時期であることを，次のように述べている。

> Childhood bilingualism usually means the establish of a second language during the early school years, after the first is learned in the family. There is a general opinion throughout the literature that this is a favorable period, because the second language will not compete derectly with the first and the learner has not yet lost his mental plasticity.[21]

さらに，Haugen は，この時期が第二言語の習得に理想的な時である理由の一つに，神経生理学 (neurological) な側面から，次のような，子供の，いわゆる，脳の柔かさをあげている。

> One American neurophysiologist reports discoveries made in operating on the brains of epileptics, tending to show that as people grow older, the language-learning centers in the brain harden. A child can substitute the right hemisphere of the brain for the left which normally controls speech, but older

persons cannot do this: "Once functional localization of acquired skills has been established, the early plasticity tends to disappear." (Penfield 1953, 206)[22]

さらに，心理・社会的側面から次のように述べている。

There is certainly also a psycho-social factor involved in this receptivity of the child-what Ervin has referred to as the child's *dependence on models* resulting from its *identification* with the people who satisfied its need (Ervin 1954). The greater readiness of children than of older persons to learn the language of their enviroment is associated with their craving for membership in the group of their contemporaries.[23]

このように，言語獲得を，新しい社会に解けこんでいくアイデンティフィケーションの確立の中でとらえていけば，当然，アイデンティティの充分に確立していない子供の場合は，新しい環境にアイデンティファイしやすく，従って第二言語の獲得も自然におこなわれていくといえる。これと対照的に，大人の場合は，既に築きあげたアイデンティティを放棄できるわけもなく，既築のアイデンティティを新しい環境に対応するように調整・修正していく以外ない。従って，大人は，子供のもっている自然な言語獲得能力をなくしているといえる。

子供の自然な言語獲得能力を示す例は数多く報告されている。

E and A. Kenyeres (1938) published a valuable study of their daughter Eva during their stay in Geneva. When they arrived she was 6:10 old and knew, besides her Hungarian, her L^m 〔mother language〕, some German, but no French. During 10 months Eva learnt French, with the possible exception of some verbal forms, like a native of Geneva, although her home language continued to be Hungarian[24] (〔 〕内筆者注)

Leopold の娘 Hildegard は，二才をこえると，混成文の中から徐々にドイツ語の要素が消えていき，やがて英語のみで話すようになったが，4.11～5.6の間ドイツに滞在しているうちに，ドイツ語を話すようになり，合衆国に帰ってきてからも，しばらくは英語が話せなかったが，五週間程たつと，彼女の発話は，ドイツ語と英語が均衡した状態となり，その時期以降急速に英語にもどっていったと報告されている[25]。

上記 Hildegard の例は，子供は，どの言語でも，その言語の使われる環境に生活を多くをおきさえすれば，教えられなくても，自然にその言語を獲得していく能力をもっていることのみならず，子供は，たとえ一度身につけた言語でも，その言語の使われる環境が小さくなれば，その言語を忘れてしまうという，いわば，子供はことばを獲得するのも速いが忘れるのも速いという特性を持っているといえる[26]。

しかし，こうした子供の自然な言語獲得能力は，子供がその言語環境に生活の多くをおきさえすれば，例外なく発揮されるとはいえない。このことは，ことばの獲得をアイデンティティの確立の過程の中でとらえれば当然のことといえる。

Buxbaum は，次のような報告をしている。

> John was an 8 year old boy who had come to the United States from Germany at the age of three. John had an excessive admiration for his father and competed with him desperately. He readily adopted his father's opinions, including his disapproval of American education and culture. He went to school, but failed to develop friendships. In the course of time and analysis, the feelings which had led to a strong identification with his father changed. He shifted the focus of his interests outside of the family, took up baseball, played with the neighbouhood gang, and began to speak the dialect of his pals[27]

上記における，John の第二言語の獲得は，近所の子供とベースボールをする中で，その子供達となじんでいき，新しい環境・文化に批判的な父親の影響から離れていったという，第二言語環境になじむ，いいかえれば，新しい環境にアイデンティファイしようとする下地ができたところで，子供の自然な言語獲得能力が発揮されていったといえる。

カナダのモントリオールで，Lambert と Tucker は，家庭およびその周辺社会では英語が用いられている，いわゆる英語社会の子供何人かを，フランス語で教科が教えられている，普通フランス語社会の子供が学ぶ，フランス語学校に入学させ，その発達を観察していった。

この子供達の第二言語（フランス語）の獲得についての問には，次のように答えている。

> The answer is that they fare extemely well when compared with children from French homes who follow a normal French program of study[28]

また，彼らの第一言語（英語）におよぼす影響についての問には，次のように答えている。

> The overall answer is that they are doing just as well as the English Controls at the end of grade IV, showing no symptoms of retardation or negative transfer.[29]

この観察から，英語社会の子供達は，フランス語学校に入った事により，自然に第二言語（フランス語）を身につけ，また，第一言語（英語）も少しもくずれることがなかったことがわかる。

この子供達の教科に与える影響についての問には，次のように答えている。

> The answer is that on tests of computational and problem-solving arithmetic, they perform at the same high level as the Controls.[30]

知能に与える影響についての問には，次のように答えている。

> There are *no* signs at the end of grade IV of any intellectual deficit or retardation attributable to the bilingual experience, judging from yearly retestings

with standard measures of intelligence, nor is there any sympton of their being handicapped on measures of creative thinking.[31]

この観察から，彼らが第二言語で学習していったことによって，教科内容の学習が遅れることも，知能の発達に影響を与えることもなかったことがわかる。

モントリオールにおける，異った言語環境におかれても，知能も言語も健全に発達していったことは，同じ状況がいたる所であるアメリカ合衆国の場合と，はっきりした対比を示している。なぜなら合衆国においては，たとえば，New York に定住するようになった，プェルトリコ人の子供は，家庭およびその周辺社会ではスペイン語の，学校では英語の環境にあるにもかかわらず，必ずしも第二言語（英語）が完全に習得されているとはいえず，教科内容の理解にも遅れがみられたり，知能も健全に発達していかない場合が多くみられるからである[32]。

家庭およびその周辺社会では第一言語環境，学校では第二言語環境という同じ状況下におかれていても，モントリオールでは，言語の習得においても，知能の発達についても，何ら影響がみられなかったのと対象的に，アメリカ合衆国では，大きな影響がみられることの原因について，Ervin-Tripp は，言語外の事象をあげ，モントリオールにおける成功の要因を次のように述べている。

In the Montreal enviroment, English-speaking children have no sense of inferiority or disadvantage in the school. Their teachers do not have low expectations for their achievements. Their social group has power in the community; their language is respected, is learned by Francophones, and becomes a medium of instruction later in the school. In the class rooms, the children are not expected to compete with native speakers of French in a milieu which both expects and blames them for their failures, and never provides an opportunity for them to excel in their own language.[33]

合衆国においては，上記とは逆の現象，つまり，チカノ，プェルトリカン，インディアンの子供の劣等意識（sense of inferiority），先生のそうした子供達に対する偏見（low expectation），子供達の家庭・周辺社会の地位の低さ，第一言語の社会的地位の低さなどがあり，こうした言語外の事象のために，合衆国においては，モントリオールにおけるような成功がなかったといえる。

このように，合衆国における子供の第二言語の獲得は，少数民族の子供が合衆国員へと同化する（identify）過程としての英語獲得の問題であるが，このことは，子供の，いわゆる脳の柔らかさのみを基準に，単に子供を第二言語環境におくだけではすまされない問題，すなわち，少数民族の社会的地位，そしてそれが起因となる子供達の劣等意識の問題が，第二言語獲得以前の問題としておこっている。そうしたなかで，合衆国では，少数民族の子供の言語を含めて健全な教育をむしばんでいる，社会的偏見，子供の劣等意識をとり除こうとする試みであるバイリンガル教育の機運が，小池生夫が次に述べるように熟してきている。

アメリカでは目下，バイリンガル教育が盛んである。これは，いわゆる，Title VII といわれる二言語教育法（Bilingual Educton act）の制定により，連邦政府が6年間に4億ドルの財政支出を認めたことによる。……このことは，アメリカに住む少数民族たちへの祝福となったばかりか，じつは，アメリカが，人種一体の「るつぼ」社会から，人種平等の「モザイク」社会を認めようとする発想の転換を象徴的に物語るものであった[34]。

合衆国では，少数民族の子供の第二言語（英語）の獲得は，単に，ことばの問題にとどまらず，「るつぼ」社会から「モザイク」社会への発想の転換という形で，大きく，少数民族の子供達の教育をバイリンガル教育の中でとらえていこうとしているわけであるが，ここで，すこし，バイリンガル教育の行われた実績のある，ヨーロッパ，南アフリカ連邦の例をながめてみよう。

第二次世界大戦前のアルサス・ローレンにおいては[35]，1,500,000人の住民がドイツ語を母国語としていたにもかかわらず，フランス語で教育される学校しかなかったが，子供達は，充分に，フランス語を習得したとはいえなかった。また，カタロニアにおいては[36]，カタロニア語を母語とするカタロニア人とカストリア語を母語とするカストリア人が住んでいたにもかかわらず，カタロニア語で教育する学校しかなかったが，カストリア人の子供は充分にカタロニア語を習得したとはいえなかった。このアルサス・ローレンとカタロニアにおける，第二言語による教育の失敗例は，アルサス・ローレンにおいては，住民達の denationalization（国籍変更）に対する反発，カタロニアにおいては，カストリア人達の，唯一の教育手段がカタロニア語であることに対する反発意識といったことが原因となっている点において，合衆国における，少数民族の子供に対する，英語による教育の失敗例と本質的には，同じ問題を含んでいる。一方，ルクセンブルグにおいては[37]，第二言語により教育される科目が徐々に増やされていき，そうした中で，子供達は，第二言語をも自然に獲得していった。これは，バイリンガル教育の成功例といえるが，このことについて，Ries は[38]，ルクセンブルグ人達は，強い愛国思想に固っておらず（lukewarm patriots），偏見を余りもたない（fewer prejudices）国民であり，こうした気質からくる，外国語・異文化への接触に対する好意的態度を，ルクセンブルグにおけるバイリンガル教育の成功の要因としてあげている。

こうしたヨーロッパの例をみてみると，合衆国におけるバイリンガル教育が成功するか否かは，「モザイク」社会への発想の転換が，少数民族を含めた，全国民的規模で行なわれうるか否かにかかっているといってもいいようである。

南アフリカ連邦は，現在，厳しい人種差別があり，それが教育行政にも反映し，言語を区別した教育が行なわれているが，第二次世界大戦前には，バイリンガル教育が積極的に行われていた。Malherbe は，1938年に，単一言語で教育が行なわれている学校と，二言語で教育の行なわれている学校の，1,800人の子供に対して，種々のテストを行った。バイリンガル教育の行なわれている学校は，子供の初期の段階では，子供の母国語で教育を行ない，その段階をこえると，外国語科目以外は，全て二言語で教育を行っていった。バイリンガル学校の第一言語と第二言語の習得について次のように述べている。

> As regards attainment in the second language on the part of both English and Afrikaans-speaking pupils, we found a considerable superiority amongst those pupils who attended the bilingual school.....As regards the first language or mother tongue, whether English or Afrikaans, there was no loss whatsoever on the part of those pupils attending the bilingual school.[39]

上記の如く，南アフリカ連邦では，かってバイリンガル教育が成功していたわけであるが，激しい人種差別と相まって，バイリンガル教育も消滅していった。一方，合衆国においては，「るつぼ」社会から「モザイク」社会への発想の転換にともない，バイリンガル教育が行なわれつつあり，少数民族の主体性（アイデンティティ）を重んじるこの方向の教育の今後の進展は，しっかりみつめていきたい。

3. おわりに

二言語環境の幼児言語発達については，二才までは，生産面においては，二言語から一つのシステムを発達させており，このことが幼児の混成文として現われていること，この混成文は，幼児の生得的な言語能力の発達のなかで論じられる必要があること，さらに，二才以前の受容面における二言語を区別しうる認識が土台となり，生産面においても，二才以降，二言語が区別されていくこと，以上三点を主に論じたが，伊藤克敏が「ことばの発達の前に幼児は生後8ヶ月頃から，先ず，自分の環境構造の認識と動作の模倣能力が発達し，急速に言語習得の準備が進む。そして，そういった環境の認識が意味（認識）構造となり，15ヶ月頃となるとそのシンボルが始る。[40]」と述べているように，幼児の言語発達は，幼児の外界の認識活動と密接なつながりがあるので，二言語環境の幼児の，受容面と生産面において二言語を区別していくことも，幼児の外界の認識能力の発達と相まって，考察していく必要がある。こうした点の解明は，今後の大きな研究分野といえる。

子供は，二言語の量がバランスさえとれておれば，自然に，二言語を身につけていく能力をもっている。これは子供の，いわゆる，脳の柔らかさと関連があり，この脳の柔らかさが固まっていく過程は，子供が自分の主体性（identity）を築いていく過程としてとらえることができる。この主体性をきずく，社会的・心理的基盤がくずれると必ずしも，子供の自然な言語獲得能力が発揮されるとは限らなくなる。従って，子供を二言語環境におき，二言語を習得させていくには，それぞれの言語資料を充分にしておくだけではなく，その他に（それ以上に）子供が新しい言語に入っていける環境づくりが必要といえる。合衆国の少数民族の子供達は，そうした環境づくりが充分ではないところで，学校では第二言語（英語）で教育され，その結果言語のみならず他の教科，知能の発達にも大きな影響を与えてきたが，ようやく，そうした環境づくりの一環としてバイリンガル教育がおこってきたが，こうした教育の成果は，アイヌ，朝鮮人，都会の出稼労働者，沖縄といった問題を考えるとき，我国でも決して無縁なものでは

なく，その成果をしっかり見守っていきたい。

Refesences

1) 小林素文「二言語併用者の諸問題—言語心理学の立場より（その1）—」愛知淑徳短期大学紀要第15号 1975.

2) Haugen, E. "Language Contact and Immigrant Language in the United States: A Research Report 1956—1970." *Current Trends in Linguistics* 1973 ed. by T.A. Sebeok Mouton p.548.

3) 村田孝次「幼児の言語の発達」1968 培風館 p.14.

4) Vildomeg, V. *Multilingualism* 1971 A.W. Sijthoff-Leiden p.25.

5) Cazden, C.B. "Problems for Education,: Language as Curriculum Content and Learning Enviroment" *Language as a Human Problem* 1973 ed. by M.Bloomfield and E.Haugen. W.W.Norton & Company. Inc.New Yock. p.139.

6) 村田孝次 op. cit. p.240.
なお，この中の時間関係を示す「過去」については，母親の過去についての発話を理解した例であり，幼児自身の直接の発話ではない。

7) Vildomeg, V. op. cit. p.25.

8) 言語の伝達機能面において，二言語を言語干渉もなく使いこなせるという意味での"完全"であり，文化の区別の有無はここでは含めていない。

9) Leopold, W.F. *Speech Development of a Bilingual Child Vol.*III 1970 AMS Press, Inc. New york p.184.

10) Ibid., p.186.

11) Ibid., p.p.181-182.

12) Nagara, S. *Japanese Pidgin English in Hawaii: A Bilingual Description* 1972 The University Press of Hawaii p.108.

13) Leopold, W.F. op. cit. p.181.

14) Haugen, E. *Bilingualism in the Americas: A Bibliography and Research Guide* 1956 American Dialecta Society, University of Alabama Press p. 67.

15) Lewis, E.G. *Multilingualism in the Soviet Union* 1972 Mauton p.236.

16) Ibid., p.237.

17) Leopold, W.E. op. cit. p.p.179-180.

18) Ibid., p.p.186-187.

19) 大久保愛『幼児のことばとおとな』昭和48年 三省堂 p.46.

20) 二言語環境の幼児の言語発達についての文献は，Ronjat, Leopold の他に，Pavlovitch, M. の記録が，Lewis (1972) 上掲書の中に紹介されている。さらに Burling, R. "Language Development of a Garo and English Speaking Child," *Word 15*, 1959, p.p.45-68, Jones, R.M. "Situational Vocabulary," *International Review of Applied Linguistics 4*, 1966 の中でも述べられているが，二才以降の言語発達についての充分な資料とはいえない。

21) Haugen, E. *Bilingualism in the Americas*, 1956 p.73.

22) Ibid., p.73.

23) Ibid., p.73.

24) Vildomeg, V. op. cit. p. 27.
同質の例も同書の中で数多く述べられている。

25) Leopold, W. F. op. cit.

26) しかし，二言語のそれぞれの環境で生活する機会が均衡していれば，R. Ronjat の娘 Luis のように二言語併用者となりうるともいえる。

27) Buxbaum, E. "The Role of a Second Language in the Formation of Ego and Superego" *Psychoanalytic Quarterly 18* 1949 p. p. 279-289.

28) Lambert, W. E. and R. G. Tucker, *Bilingual Education of Children* 1972 Newbury House Publishers, Inc. p. 204.

29) Ibid., p. 203.

30) Ibid., p. 205.

31) Ibid., p. 205.

32) こうした例については，Spolsky, B ed. *The Language Education of Minority Children* 1972 Newbury House Publishers, Inc. の中に数多くみられる。

33) Ervin-Tripp, S. M. "Structure and Process in Language Acquisition" *Language Acquisiton and Communicative Choice* 1973 Staufoid University Press. p. 92.

34) 小池生夫「バイリンガリズムの研究」『月刊言語』Vol. 5 No. 10, 1976. 大修館書店 p. 40.

35) Vildomeg, V. op. cit. p. 30.

36) Ibid., p. 38.

37) Ibid., p. 30.

38) Ibid., p. 37.

39) Malherbe, E. G. "Commentaries on 'How and When Do Persons Become Bilingual?" *Description and Measurement of Bilingualism* 1969 ed. by Kelly L. G. University of Toronto Press. p. 47.

40) 伊藤克敏「幼児のことばと認識の発生」『月刊言語』Vol. 2 No. 9 1973 大修館書店 p. 57.

(昭和52年1月14日受理)